水曜通信14

東北学院宗教センター編

2022年
1月

LIFE　LIGHT　LOVE

「ゲッセマネの祈り」
（マルコによる福音書 14:32－42）
田中忠雄作　1987年

「ゲッセマネで祈る」の場面。
ユダによって裏切られ、引き渡される直前の出来事。十字架の死を前に祈るイエスと、誘惑に陥り、眠ってしまっているペトロ、ヤコブ、ヨハネ。

第８回
泉キャンパス礼拝堂
ステンドグラス紹介

悪は無数、善は一つ

「悪は易しく、しかも無数にある。しかし善はほとんど一つである」という言葉は、パスカルの『パンセ』の中にある有名な一節である。確かに悪は様々な姿や形で登場し、時と場合によっては悪にもなれば善にもなる。しかし「善」はあらゆる「善いこと」の中に程度の差はあれど内在する。

もしそうなら、「善」を心に留め、「善」に生きることは、時と場合によって左右されない、共通の価値に連なることを意味する。すなわち世界には、昔も今も未来にも変わらない良いものがあるということだ。世界に変わらないものはないと言う人々も思想もあるが、「善」に関してはほとんど不変である。

「善」を行って生きるとは確実なものを土台にして生きることを意味する。そして「善」は神に属するものである。主イエスは「神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」（マルコ10：18）と言われ、ヨハネも「善を行う者は神に属する人である」（三ヨハネ1：11）と言っている。

東北学院宗教センター主任（宗教部長）　野村 信

次回：第49回水曜公開礼拝(公開オンライン礼拝)
1月26日配信予定
学校法人東北学院ホームページをご覧ください。
【第１部　礼拝】
説教：大西 晴樹（院長・学長・宗教センター所長）
奏楽：菅原 淑子（本学礼拝オルガニスト）
【第２部　音楽による賛美】
演奏：菅原 淑子
独唱：我妻 万希子（メゾソプラノ）

第48回 水曜公開礼拝報告（説教：松本 宣郎、奏楽：加藤 晶子）

2021年12月22日（水）　公開オンライン礼拝

讃 美 歌：98番「あめにはさかえ」
聖　　書：イザヤ書　９章５，６節
　　ヨハネによる福音書　１章１－５節
讃 美 歌：103番「まきびとひつじを」
説　　教：「キリストはわたしのためにも」
頌　　栄：544番「あまつみたみも」

【説教要旨】

今年もクリスマスを迎えます。誕生するキリストを旧約の預言者は「驚くべき指導者」と言いました。しかしマリアの夫ヨセフは「民を罪から救う」者、すなわち救い主と天使から告げられました。野原の羊飼いにも知らされた「救い主」です。この救い主の誕生を私たちは祝うのです。今日は、それが私、つまり自分自身の救い主である、ということを強く意識したいと思います。

「ヨハネ福音書」はキリストの誕生を象徴的に「暗闇への光の到来」と記します。私たちが生きているこの世界は闇である、と。私たちが死すべき存在であることひとつとってもこのことは分かります。そこにキリストの光が差し込むのです。クリスマスはこの私のために、ということを感謝したいと思います。

（元理事長・院長・学長　松本 宣郎）

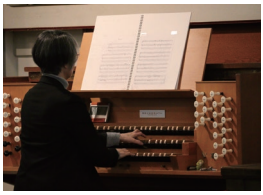
前　奏：H.シャイデマン（1595－1663）「マリアは天使に言った」
後　奏：M.ヴェックマン（1616－1674）「マニフィカート　第２旋法」 第１節

ルカによる福音書第１章で、おとめマリアは天使から受胎告知を受けます。マリアは戸惑いつつも「私は主の仕え女です。お言葉どおりこの身になりますように」と天使に答えました。前奏は、その言葉に基づくモテットを、シャイデマンがオルガンで即興演奏した曲。後奏の「マニフィカート」は、続くルカによる福音書第２章で、マリアが神の大いなる業を讃えた賛歌です。　（本学礼拝オルガニスト　加藤 晶子）

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：加藤 晶子 ）

1．J.シュテフェンス（1559－1616）「来たれ　すべての人の贖い主よ」第１節、２節
2．J.F.ダンドリュー（1682－1738）「ミュゼット」 ト長調の組曲
3．H.シャイデマン　（1595－1663）「天使は羊飼いに言った」
4．J.S.バッハ　　（1685－1750）「甘き喜びのうちに」BWV729

礼拝の前奏・後奏と音楽による賛美の曲全体で、クリスマスの情景を彷彿とさせる組み立てを試みてみました。１.は、この曲名の言葉で始まる中世に作られた待降節の聖歌を編曲した曲です。この聖歌はM.ルターがドイツ語に訳し「今、来たりませ」で始まる讃美歌として今も広く歌われています。２.の「ミュゼット」は、二本の素朴な笛が奏でる音楽が、羊飼いが野宿をする牧歌的な風景を表わしているように感じます。ダンドリューはフランス王室礼拝堂のオルガニストも務めたフランス・バロック期の音楽家です。３.は、野宿をしていた羊飼い達に天使が現れ、救い主がお生まれになったという大きな喜びを告げる、ルカによる福音書第２章の内容によるモテットを元にした曲です。４.は、イエスの誕生の喜びを表した歌で、14世紀頃から歌われていました。それを J.S.バッハが、メロディの切れ目を流れるような動きで繋ぐ方法で編曲しました。大学礼拝で使っている讃美歌集では102番にあたり、７世紀もの間、歌われ続けている事に不思議さを感じます。　（加藤 晶子）



東北学院の草創期（13）「最初の学生」

― ④　早　坂　千三郎　―

早坂は古川の出身で、若くして押川の薫陶を受けてキリスト者となり、1885（明治18）年４月の古川教会の創立に際しては、最初の14名の会員の一人となりました。翌年春の神学校開設と共に入学しましたが、「ハヤサカは結婚して二人の子供がいます」（ホーイの手紙）という家庭の事情によるのか、途中で中退します。しかし伝道の志は捨て難く、宣教師ミロルを助けて宮城、岩手両県下の伝道に従事しますが、その間に持ち前の潜在的な愛国的熱情が表面化し、ついには伝道者の職を辞して郷里古川の郡役所に勤務するようになりました。

さらに1892（明治25）年には、「自分自身がキリスト教の誤りに気付いたからには、同国人が同じ過ちに陥るのを黙視することはできない」という主旨の序文を付した書物『通俗非基督教全』を刊行します。その的確な内容は、逆に当時の神学校の教育水準の高さを推察させると言われています。

晩年の早坂は信仰を取り戻し、1937（昭和12）年には数十年ぶりに教会に足を運ぶようになり、自宅を開放して家庭集会を開いたり、教会の財政を助けるなど、母教会の古川教会を支えて、1943年７月にその生涯を終えました。

（東北学院史資料センター　日野 哲）

晩年の早坂千三郎

― 建築が語る東北学院の歴史（８）―

宮城・仙台が近代の東北地方におけるキリスト教伝道の中心地であったことはかねてより知られていますが、このことは、建物の面からも確認できます。例えば戦前の内務省が作成した統計資料を見れば、明治～大正期のキリスト教関連施設数において、宮城県は全国で５番目程度の位置にあったことが分かります。宮城県は、西洋の文物の入口としても国内有数の地位にあったのです。

明治38年に竣工した普通科校舎（後の中学部：fig.１）は、ドイツ人建築家G.デ・ラランデの作品として知られています。このデ・ラランデの建築事務所には後に日本で活躍することになる複数の外国人建築家が在籍しましたが、その一人にヤン・レツルがいました。

ヤン・レツルが来日したのは普通科校舎の竣工後ですから直接関与はしていませんが、どのような因果か、彼は後に宮城県知事・寺田祐之に請われて和洋折衷の松島パークホテルを設計します。その後、この松島パークホテルを気に入った寺田が広島県知事に転任すると、広島にレツルを呼びます。そうして建てられたのが広島県物産陳列館、現在の原爆ドームでした。奇しくもレツルが原爆ドームの設計者に選ばれた経緯を辿ると、デ・ラランデと東北学院普通科校舎にまで行き着くのです。

（工学部　﨑山 俊雄）

fig.１：東北学院普通科校舎

fig.２：松島パークホテル

ゲルハード記念室とパウル・ゲルハルト（4）

若き日の
ポール・ゲルハード

ポール・ゲルハード
（1873－1949）

ポール・ゲルハード家
左上がロバート。左下
ポール夫人ブランチは
ホーイ夫人の妹

1947年のメアリー・
エンマ・ゲルハード
（1878－1963）

ゲルハード式英語教授法

敬虔主義の詩人パウル・ゲルハルト（1607－76）の子孫はアメリカに移住し、ポール・ゲルハード（1873－1949）はランカスター近くで生まれました。おそらく帰国中のホーイ（1858－1927）の勧めにより、この若き宣教師が仙台に着任したのは1897年で24歳のとき。英語教育のためで、文字ではなく、耳から学ぶ英語教育は画期的でした。

1904年仙台生まれの長男のロバート・ハスラー・ゲルハードも父のあとを継いで、日本人のための英語発音についての本を出版し、戦争中は強制送還されアメリカにいましたが、戦後に日本に戻り、新設された国際基督教大学に移り、そのゲルハード式発音表記は1951年の『最新コンサイス英和辞典』で採用されています。ロバート・ハスラー・ゲルハードは日本での印税をそっくり東北学院に寄付しました。ゲルハード記念室と名付けられのはそのためです。ポールの妹のメアリー・エンマも戦争時の1941年にアメリカに帰国しましたが、戦後の1961年に学院の教え子たちが募金活動で彼女を日本に招待し１ヶ月に及んで大歓迎し敬慕と親愛の情を表しました。これは宣教師時代の終幕の儀式であったと出村彰先生は記しています（『東北学院百年史』1054頁）。

（理事長特別補佐〈宗教センター担当〉鐸木 道剛）

美術による賛美(11)

537年献堂
イスタンブール
ハギア・ソフィア大聖堂

すべての芸術は、神さま、あるいは天国を再現します。その出発点はイエスさま。人となった神の肖像画（イコン）です。つまり神そして天国の表象です。

537年にコンスタンチノープルのハギア・ソフィアが完成した時、歴史家プロコピウスは言いました。「この聖堂に足を踏みいれると、・・見る人の心は神へと挙げられ、高みに浮かび、神は遠くにいるのではないことを実感する」。

また988年にキリスト教を受容したロシアの記録があります。ウラジミル大公は各国に使節を送って、それぞれの宗教を確かめます。コンスタンチノープルから戻った使節が報告します。「彼らはわれらを自分たちの神に仕える場所にみちびいたが、そのときわれらは天上にいたのか、それとも地上にいたのか、わからなかった。地上にはあのような眺めも、あれほどの美しさもない」（『原初年代記』中村喜和訳）。それは様々な感覚を通しての感動でした。視覚（イコンと壁画）、聴覚（礼拝音楽）、嗅覚（お香）です。東北学院のシュネーダー院長の指導で完成した、私たちのラーハウザー記念東北学院礼拝堂も、美術（ステンドグラス）と音楽（オルガン）を備えており、このような中世的な芸術観の具体的な現れなのです。

1932年献堂
ラーハウザー記念
東北学院礼拝堂

（鐸木 道剛）

いのち　ひかり　あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第14号
2022年１月13日発行
〒980-8511　仙台市青葉区土樋１-３-１
発行責任者：宗教センター主任　野村 信
東北学院宗教センター　TEL：022-264-6558
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp